

市場原理と教育水準 ー イギリス中等教育を素材として ー

研究開発部試験基盤設計研究部門 山 村 滋

教育水準を向上させることは、言うまでもなく各国の教育制度・学校制度のもっとも基本的役割の一つである。しかしながら教育水準の向上という目的を達成する手段・方法は一律ではない。各国の教育政策担当当局は、教育水準を向上させるために、最も効果的・効率的な方法を模索していると言っているであろう。

近年、先進資本主義諸国での教育改革は、市場原理に基づいて行われる場合が多い。わが国でも市場原理的な教育改革の方法を採る自治体が増加しつつある。イギリスでも、1988年教育改革法により、学校選択の自由化と生徒数に応じた学校への予算配分方式により、擬似市場が導入された。しかしながら市場原理が、その主張者の言うように教育の効率性を高めるー例えば教育水準を向上させるーために効果的であるか否かは、今日まで論争的な問題である。

市場原理の効果に関して、例えば、イギリスの代表的主張者であるセクストン(Sexton, S.)は次のように言う。父

母の学校選択による「市場のメカニズム」を導入し、学校へ権限を委譲する。各学校が、市場で生き残ろうとするならば、それは、市場の需要に従うように教育の中身・在り方が変わり、教育水準も向上する。市場の競争メカニズムは、必然的に教育水準を向上させるというわけである。すなわち、市場原理は「競争が教育水準を向上させる」という仮説を有しているのである。したがって、この「仮説」を検証することが、今日、極めて重要な課題なのである。

そこで、本稿では、イギリスの中等教育を素材として、最近公表されるに至った付加価値データ(Value Added Score: VAS)と筆者が実施した中学校長への調査データを組み合わせて、上記の仮説を検証することを試みた。

分析のモデルは以下の図のようである。競争の程度として、ここでは、学校(校長)の認識に基づく「行動モデル」に基づき、①地域の競争の程度、②当該校の競争の程度を校長の認識に基づき指標化した。また、アウトプッ

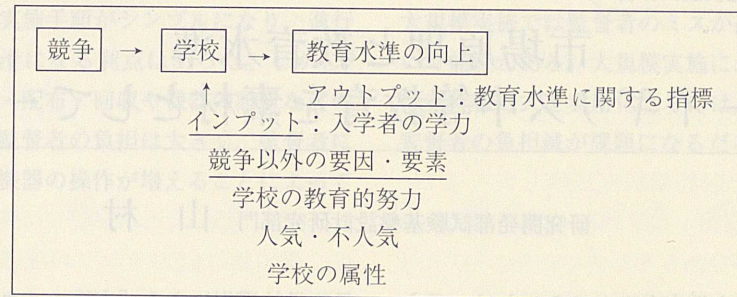


図 分析のモデル

トとしては16歳段階での学力検査 (GCSE)の学校ごとのVASを用いることにした。そして、①地域の競争モデル、②当該校の競争モデル、③地域の競争プラス当該校の競争モデル、という三つのモデルに、VASを被説明変数とする重回帰分析を適用した。

その結果、①付加価値スコア KS3-GCSEの2002年度データを被説明変数とする重回帰分析、②付加価値スコア KS3-GCSEの2003年度データを被説明変数とする重回帰分析、③付加価値スコア KS2-GCSEの2004年度データを

被説明変数とする重回帰分析、において上記の三つの競争モデル、いずれにおいても「競争の指標」が正の有意な影響力を有していることは確認できなかった。すなわち本稿で用いたデータおよび分析枠組みの下では、その効果は見られなかったものであり、市場原理が教育水準を上昇させるために効果的であるとは言えないと結論付けられる。本稿の分析結果は、「市場原理には教育水準を向上させるような効果がない」という仮説を一步進めるものと言えるのである。